

---

# 月とウサギ

雨雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月とウサギ

### 【Zコード】

Z65860

### 【作者名】

雨雨

### 【あらすじ】

不器用な男=月神様と思い込みがやや激しい動物=ウサギの種族を超えた恋愛（変愛？）は色々あつたけど、めでたしめでたし…で終わればよいものの、動物は得意の勘違いでついに天上神の国である天橋國あまのはしのくにから出奔。

やつと再会した（この間、数千年）と思つたら、ウサギは人間の国で土地神（ある意味リア充）に收まつていて、その土地から切り離して天橋国に連れ戻すのは容易でない。しかも未だにウサギは勘違い継続中。

とりあえず眷属に戻すことはできたものの、土地神をやめさせるには、地下神の許しを得ねばならないし、誤解の原因となつた神様も現在は地下神の国である地道國じのみちのくに在住。

ところが天上神と地下神はかつて血みどろの離婚劇を繰り広げたため、国交が全くなく、地道國への入口がどこにあるのかわからない。天橋國でそれを知っているのは天上神と原因の神様だけなんだけど、天上神は絶対に口を割らないし、原因の神様はすでに地道國に移住してしまっている。

どうにか誤解を解いて、天橋國につれ戻したい月神様視点（コメディ？）寄りと、勘違いに捕らわれすぎて、男の気持ちに全く気付かない激二ブなウサギ視点（シリアルス？）寄りで展開する予定。

## 新月の夜、巨石の上で（ウサギ視点）（前書き）

R15は一応の保険です。  
なるべくそういう描写がなによつて書いていくつもりです。

## 新月の夜、巨石の上で（ウサギ視点）

夜。

雲一つなく、星が煌めいているが、何かが足りない夜。  
何が足らぬのか。

月だ。

月がない。

それもそのはず、今宵は、新月。

ククつとほくそ笑むのは、一匹のウサギ。

この世でただ一匹、金の瞳のウサギ。

この世の兎の眼は、茶か黒。

この世で金の瞳をもつ兎は、このウサギのみだ。

この世で唯一のウサギは、はるか昔、この地に降り立つたときに  
『えられた巨石の上に座つていた。

月の見えぬ日は、人が建ててくれたウサギの為の社で眠るのが日  
課だったが、今日は珍しく気が向いてここへきていた。

「いささか、憐れと思わぬでもないな。力が万全となる日は1日だけとは。

今宵など、何もできずにむぞ、歯痒いことだらうよ」  
空を見上げたウサギはつぶやく。

今日、出会つたヘビが、教えてくれた話。

ウサギがこの地に降り立つた日、月は禁忌を犯したらしい。

そんな話が、ここへと足を向けることになった。

そして今、煌めく星々から漏れ聞こえた話。

禁忌のせいで、元来丸い姿 今は満月と呼ばれる しか見せなか  
つた月が、1日1日と、姿を変えねばならなくなつたらしい。

そして月は満ちるたび、元来の力を少しづつ取り戻すが、欠ける  
たびに少しづつ元来の力を失い、今宵のように完全に空から姿を消  
した日は、完全に力を失うらしい。

円の支配がないせいが、今日の星々はおしゃべりだ。

「どうりで、口口口と姿を変えるようになったと思ったわ。そのような身では、夜を支配するのも苦労しておひつな。

やはりこたさか、憐れよ」

憐れとつぶやく割に、ウサギの顔に浮かぶのは笑みだ。

「そうでもない」

応えなぞ望んでいなつぶやきにおや、とウサギは声の主へ振り向いた。

声の主が誰であるのかに気付き、体が一瞬震える。

「お懐かしや、夜の支配者様。

まさか、地上へ降りてこられるとは。

お父上の許しでも得られたのか

ウサギが座るのはウサギに与えられた巨石。

ウサギの許しがない限り、他の者なぞ上がれぬはずのその場に、いつのまにやらもう一人、男が佇んでいた。

「父の許しなぞ、あつても降りてこられぬよ。

父が母の領域に干渉なぞ出来ぬ。その逆も然り、ではあるがな」

肩をすくめてほほ笑む男は、美しかった。

この世のどんな美女でも、この男には敵うまい。

この男こそ、月だった。

月が象徴するのは美。

この世のあらゆる美しさを具現化した存在が、今、ウサギの傍に

佇む男だった。

「ならば、なぜ」

望まぬ訪問者を咎める気はないが、ウサギからは歓迎の様子も浮かばなかつた。

男は唯人なら、見惚れ、呆けることしかできなくなる存在だが、ウサギにそれは通じない。

「どうやらな。天上での力を失つ分、こちらへ干渉できる能を得たようだな。

新月になれば、いつかつて地上にもひの身を下すことができる」嬉しそうに笑う月。

「兄様たちにしでかしたことによる影響か？」

「おそらく。お前の兄たちには感謝せねばな」

「それに関しては、こちらも礼をせねばなるまいな。

兄様たちを救うてくれて、それだけは、感謝しているよ。

だが、私が<sup>そのようない</sup>から感謝の言葉を聞きたくてここへ来たのか？」

月はウサギの許しは得ず、ウサギの傍に座る。

「新月の度、ここを訪ねていたのだがな、お主はつれない。

新月の日にしか、地上に降りられぬが、幾千、幾万ともつかぬ新

月を迎えてここを訪ねても、一度も会えないとは！

だが、今日、やっと会えた。

元気な姿が見れて嬉しく思う

月は言いながら、ウサギの頭を撫でた。

月のその言葉に、行動に、わずかに瞠目したウサギだったが、それ以上は何の変化も見せなかつた。

「それは私の質問の答えではないな。何用だと聞いたつもりだったんだが」

「ただ、お主に会いたかった。お主と話がしたかった」

ウサギに眉があつたなら、片眉をあげただろ。

けれど、残念なことにウサギに眉はない。

しばし月の意図を測りかねたが、やがて命<sup>めい</sup>がいつのように頷くと、嘆息した。

「夜の支配者様と私が話すことなど、一つしかないではないか。の方の話をいくらしたところで、傷を舐め合<sup>あわ</sup>うようなもの。そのようなことをしても、の方の傍へなぞ行けぬよ」

ウサギの言葉に月は苦笑いを浮かべた。

そして、おもむろにウサギを抱き上げ、その視線を合<sup>あわ</sup>わせる。

「お主は考えすぎだ。あの子の話でなくともよい。

ただただ、お主と他愛のない話がしたいのだ。

なぜ私の名前を呼んでくれぬ。  
以前のように、呼んでおくれ。

なあ、私は今でも、お主は私のだと思つていいよ。  
本当に、会いたかった。

昔も今も、この先も、私はお主を変わりず愛していくよ、トライ

熱い瞳で語りかける男は、ウサギを真名で呼んだ。

ウサギの全身の毛が、沸き立ち、体が膨らむ。

それは歓喜もあり、恐怖でもあった。

今日、巨石になぞおらねばよかつたと後悔したが、遅かった。  
この忘れもしない感覚は、月がウサギをおのれの眷属にした証だ  
った。

震えながら、左の手の甲を見る。

真っ白な毛に覆われていたそこに、くつせつと円の印が赤い毛  
となつて浮かんでいた。

まさか、男が地上へ来れるとは思つていなかつたのだ。  
まさか、いまだにこの男が己を支配下におくことができるとは思  
つてもみなかつたのだ。

「未だに天上の者は悪趣味か」

罵る言葉はか細い。

「やつとお主と会えたのだ。

一度とお主を失いたくないのだよ」

男の唇が、ウサギの頬に触れる。

（愛しているのは、失いたくないのは、私ではなく、の方なのだ  
うつ、夜皇様）

男の触れる感触が、とても心地よい半面、空しくもあった。

新月の夜、巨石の上で（月神視點）（前書き）

お待たせしましたーー！

## 新月の夜、巨石の上で（月神視点）

かつて、人間の国である、中間国なかのまのくにと、天上神の国である、天橋國あまのはしのくにとを繋ぐ橋があつた。

今はもうない。

天橋國あまのはしのくにの神々が、人の国の統治を放棄し、人による統治を与えたとき、それは失われた。

同時に、天の神々は人の国に降りることはできなくなつた。

もつとも、多くの神々は人の国になど行こうともしなかつたが、ともあれ、天翔大橋あまかけらるおほはしと呼ばれたその橋は失われたが、その名残が、この平原の真中に残つていた。

2つの大石が1つの巨石を支えるように積み上げられた岩。

トトラが降つた時に最初に触れたであろう岩だ。

ここはトトラの氣が、一番感じられる場所だつた。

もう数えることなぞ出来ないほど、ここへと降り立つては、トトラの氣配を追つて中間国中を探しまわり、結局最後はここへとたどり着いてしまう。

ここ以上に、トトラの氣が感じられるところはないのだった。

探せば探すほど、ここにトトラがいるとしか思えなかつた。

そして今日もまた、この岩へと降り立つたのだが、珍しく先客がいた。

それを目にした途端、それしか見えなくなつた。

白く、丸い。

そして、小さな姿。

一つも、以前と共通する容姿を留めていなかつた。

けれど、けれど。

形は違えど、それは間違ひなくトトラだと確信した。

(見つけた  
……)

「己の白い鬼が、これからに背を向け、空を睨上げていた。

間違いない、間違いない。

「己のトトリだ。

己の衝撃を何と言えばここにやる。

一言でいえば、めっちゃ可愛い……！

どんな姿になつても、己のトトリせざるなに可愛こんだらわ。  
丸い体の後ろ姿に、ちょろんと生えた耳と尻尾がピロピロと動いている。

ああ、触つて撫でて、己ねくり回してしまいたい！！！

己の欲望にうずくまし、わなわなつと震える手を思わず伸ばした時、ククッと己の前の白い毛玉が笑つた。

その嫌な笑いに手が止まる。

続く言葉は　　「己を憐れとのたまつた。

己がしでかした罪に『えられた罰』　己としてはちつとも困つていないので　　を受けた己を、憐れだと。全身が震え、ちょっと泣きそつだ。

……嬉しい。

トトラが心配してくれることが嬉しくてたまらない。

己のよつな姿になつてもなお、己を心配してくれることは……！

トトリの、その優しい心根は変わつていない。

「どうりで、口口口と姿を変えよつになつたと思つたわ。  
そのよつな身では、夜を支配するのも苦労しておらうな。  
やはりこたせか、憐れよ」

ああ、夜の支配に苦労してこるだらつなど、心配しなくてよい。

「やつでもない」

トトラを安心させたくて、その小さな後ろ姿に声をかける。

振り向いたトトラがふるりと身を震わせた。  
わかつていてるよ、わかつていてる。

お前も私に会えて身を震わすほどに嬉しいのだろう?

「お懐かしや、夜の支配者様。

まさか、地上へ降りてこられるとは。

父上の許しでも得られたのか

「父の許しなぞ、あつても降りてこられぬよ。

父が母の領域に干渉なぞ出来ぬ。その逆も然り、ではあるがな」

トトラの言葉に、思わず肩をすくめて笑つてしまつた。

相も変わらず、面白いことを言ひ。

己が生まれる前に、父と母が交わした約束はこの世の理そのもの。  
父や母さえそれを違えることは出来ぬといふことを知つていてるで  
あろつじ。

ただ、あの子を除いて。

「ならば、なぜ」

表情の読めぬ動物となつたトトラの顔から何を思つているかはわ  
からなかつたが、その声に好奇心が混じつていることは察せられた。  
ならばと、簡単に説明する。

その説明が十分とはいえないことは承知していたが、己にも自身に  
起きたことを十分把握しておらぬのだから、仕方がない。

けれどそのおかげで、こゝにしてトトラを探すことができるようにな  
つたことが、己には喜ばしくて、自然と笑みが浮かぶ。

「兄様たちにしでかしたことによる影響か?」

いきなりぶつきらぼうな口調になつたトトラに、永い時の隔たり  
を自覚する。

以前のトトラは、己にそのような物言いを決してしなかつた。

その変化は、幾分の寂しさはあつたものの、どちらかといえば、  
好ましく感じられた。

「おそらく。お前の兄たちには感謝せねばな」

「それに関しては、こちらも礼をせねばなるまいな。

兄様たちを救うてくれて、それだけは、感謝しているよ。だが、私からの感謝の言葉を聞きたくてここへ来たのか?」「いやいやいやいや。」

何を言うのか、このウサギめ。

そんなことを聞くためだけに地上へ降りるなど、そんな暇ひま神じんではないのだが。

これはじつくつと己の思いを述べてやらねばなるまいな。トトラの傍に座つて、語つてやることにした。

「新月の度、ここを訪ねていたのだがな、お主はつれない。新月の日にしか、地上に降りられぬが、幾千、幾万ともつかぬ新月を迎えてここを訪ねても、一度も会えないとは! だが、今日、やつと会えた。」

元気な姿が見れて嬉しく思う

言いながら、我慢できずにトトラに触れていた。

思つた通り、以前のトトラの髪とは異なり、柔らかくふわふわとした感触の毛だったことが少し残念だ。

己を見上げるトトラの、己が一番愛してやまぬ、金の瞳が少しだけ大きく開かれた。

姿形は変わつたが、その瞳は変わつていない。

「それは私の質問の答えではないな。何用だと聞いたつもりだったんだが」

「ただ、お主に会つたかった。お主と話がしたかった」正直な気持ちを告げると、少し間をおいてトトラが頷いたので、ほつとしたのも束の間、

「夜の支配者様と私が話すことなど、一つしかないではないか。の方の話をいくらしたところで、傷を舐め合うようなもの。そのようなことをしても、の方の傍へなぞ行けぬよ」

「まつたくと言つていよいほど理解していなかつた。」

今の己じや、憐れと言われてしかるべきだと苦笑いを浮かべる。

そして、トトラが己の元からいなくなつたのは、やはりあの子が

関わっているのだと合点がいった。

これは早急に誤解を解かねばな。

その小さな体を潰してしまわぬよう、慎重に抱きあげ、その金の瞳を見つめる。

「お主は考えすぎだ。あの子の話でなくともよい。

ただただ、お主と他愛のない話がしたいのだ。

なぜ私の名前を呼んでくれぬ。

以前のように、呼んでおくれ。

なあ、私は今でも、お主は私のだと思つていいよ。

本当に、会いたかった。

昔も今も、この先も、私はお主を変わらず愛していくよ、トトラ

一つ一つの言葉を、ゆっくりと言い聞かせながら、わずかにその

身の中に残っている力をその小さな体に注いだ。

見た瞬間に気づいていた。

トトラが土地神となつていていた。

土地神は、与えられた土地に縛られ、天空神の天橋国にも、地下  
神の地道國ちのみちのくににも属すことのできぬ神だ。

それは人に祭り上げられることによってのみ存在でき、それゆえ  
に人に忘れられれば、どちらにも属せぬ土地神は霞となつて消えて  
しまう運命にある。

どちらかの国に属す神ならば、そのようなことはない。

幸い、トトラは土地神として日が浅く、それでも人にとっては  
永い時ではあるが、土地への束縛がまだ弱い。

なんとか、また天橋国に連れてゆく事が出来るかもしれないと思  
つた。

人ごときの都合で、己のトトラを失つてたまるものか。

力を注がれたトトラの全身の毛が、沸き立ち、体が膨らむ。

その反応に満足した。

新月という悪条件にもかかわらず、己の眷属とすることができた。

やはり、まだ手遅れではないらしい。

トトラがか細い声で何か言つたようだつたが、口のものに戻すこと

とできた満足感に夢中で聞き取れなかつた。

喜びの言葉を告げ、かつてそつしていいたように、トトラの頬に口の唇を寄せた。

**新月の夜、巨石の上で（月神視点）（後書き）**

月神様は、トトラに対してもかつ傲慢な愛情を持っています；

## ウサギの社にて（ウサギ視点）

ウサギは、己の左手を見つめていた。

その後、月神は日が昇るまでウサギを愛で、消えた。  
その間のウサギは、ウサギの心は、空虚であった。

一時の寵など得たところで、満たされぬのだ。

同じく満たされぬならば、傍になぞいたくない。  
欲深い己が、傍にいれば月神を困らせる。

困らせたくないから離れたといふの。

暁。

よく晴れた暁下がり。

虫も鳥も、太陽の光にあふれた今日を楽しんで、陽気に躍動している。

それに反して、とある場所だけが沈んだ空気を凝らさせていた。  
その場所とは、ウサギに与えられた巨石のほど近くの村にひつそりと建てられた小さな社である。

社、とはいいうものの、それは高床式になつた犬小屋かと見間違うほど簡素で地味なものだ。

唯一凝つているのは、格子の扉につけられた取っ手が、黄金で作られた兔の形をしていることくらいか。

言つまでもなく、人間がウサギのためにつくつた社だ。

社の中で、ウサギは何度も左の手の甲を見ては、ため息をついていた。

その手は毛が無残に剥げ、傷ついて、いくらかの血がこびり付いている。

「齧つて毛を取り払つても無駄だつたか。

ふん、地肌にも印が現れておるわ。

いっそ皮を剥いでも…無駄であるうな」

「己の左手を忌々しく眺めやりながら、あれは夢であつてほしかつたとため息をつく。

途中まで、ウサギは夜皇のことを夢だと思っていた。

いつの間にか眠り、夜皇恋しうに己がでっちあげた夢なのだと。天の神が中間国に降りるなど、絶対にあり得ぬからこそ、夢だと。いや、あり得ないといつより、出来ないはずと、ウサギは知っていた。

それゆえ、戯れにお懐かしや、などとこいつ葉葉をかかることもできただのだ。

けれど、己の印が夢でなこと嫌になるほどウサギに血荒れせた。

己の夢であれば、夜皇がこのよだな印を刻むはずはない。己は夜皇の眷属となることを心の底から嫌惡しているのだから。夜皇の眷属のまままでいることが耐えられなかつたから己があの時、混乱のどさくさにまぎれて下に降りることにしたのだ。

「忌々しい。

またこれに悩ませられねばならぬとは、いつそまた逃げてしまいたいが、己の印がある限り夜皇が己の居所を知るのはたやすいことだ。

「どうすれば、どうすればよい?

どうすれば…」

ぶつぶつと呴いて自問するが、結論は一つだ。

どうにもできない。

そう、どうにもできるものではない。

天橋国にいたころであれば、己の印を消すことなど造作もなかつた。

あの方がいたから。

今は、無理なのだ。

あの方がないから。

天橋国にも、中間国にも、あの方はいない。

天の神も、地上のあらゆる生あるモノも辿り着くことのできぬ場所に、あの方は行つてしまわれた。

その国に行く術を知つていたのは、天橋国ではあの方一人。

「あの方のいる国へ、私がどうやって行けようか」

また、ため息。

あの方、を思い出すと慕わしさとともに、嫉妬の心も燃え上る。もうずいぶんとこの心持を思いだすこともなかつたというのに。やはり、夜皇の噂に感傷なぞ抱いて出歩いたのが悪かつたのか。「ええ、私が何を考えようと、何が変わるでもなし」

ままよ、と半ばやけくそで社を飛び出した。

村を駆けまわればこの鬱々とした気分も少しは晴れるだろつと期待して。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6586o/>

---

月とウサギ

2011年12月27日19時45分発行